

あ さ く ら し も き ょ う で ん い せ き

朝倉下経田遺跡

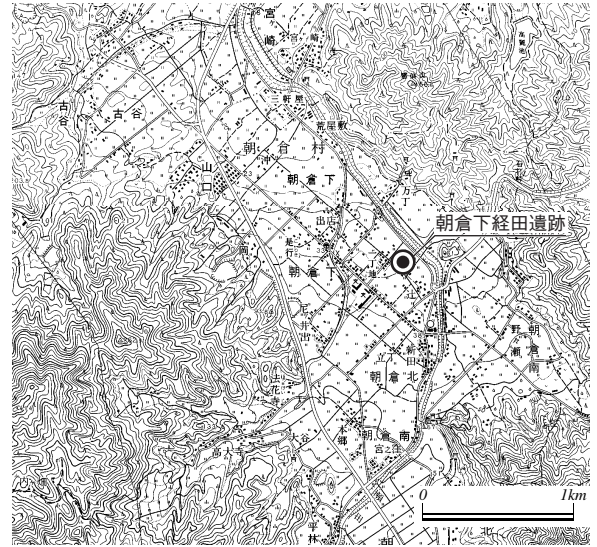
— 集落から出土した銅剣 —

調査の概要

事業名 平成18年度今治道路埋蔵文化財発掘調査
調査委託者 国土交通省四国地方整備局
調査受託者 財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター
遺跡名 朝倉下経田遺跡
場所 今治市朝倉下
調査面積 14,900m²
調査期間 平成18年6月19日～平成19年3月23日(予定)

今治道路の建設に先立ち、当センターでは、今治市朝倉下に所在する朝倉下経田遺跡の発掘調査を昨年度より行っています。

本遺跡は、鷹取山(南側)、笠松山(東側)、霊仙山(北側)に囲まれた朝倉谷のほぼ中央部、頓田川の左岸、河岸段丘上に位置し、中世・古代・弥生時代中期末の遺構が混在する複合遺

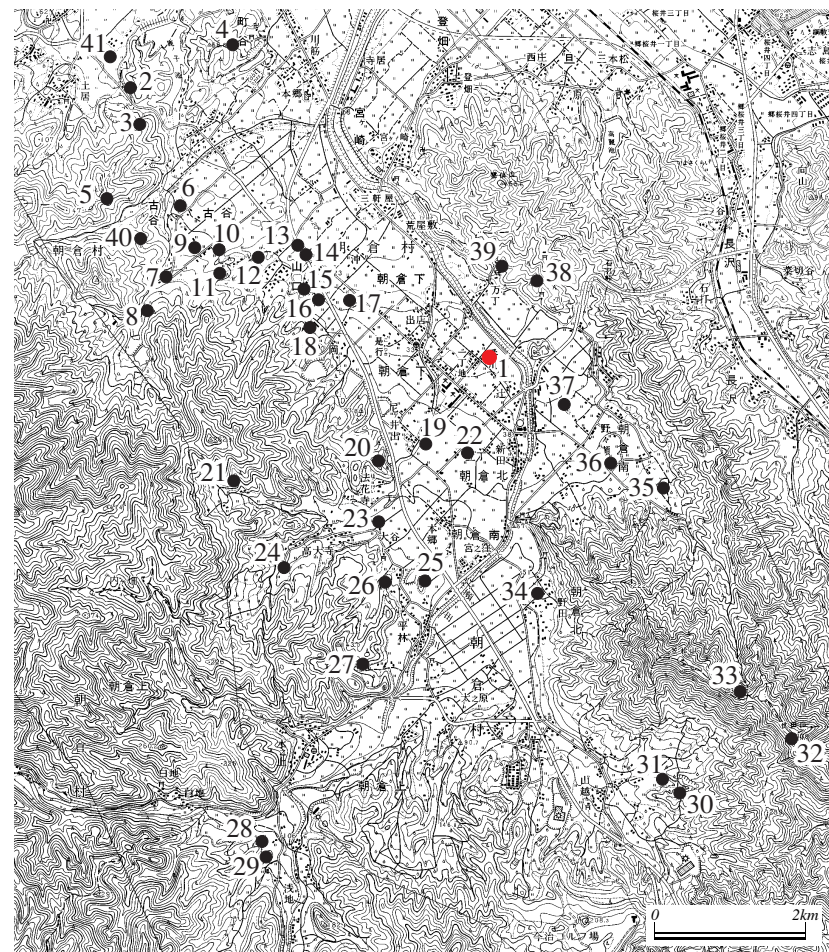


平形銅剣の出土状況

跡です。

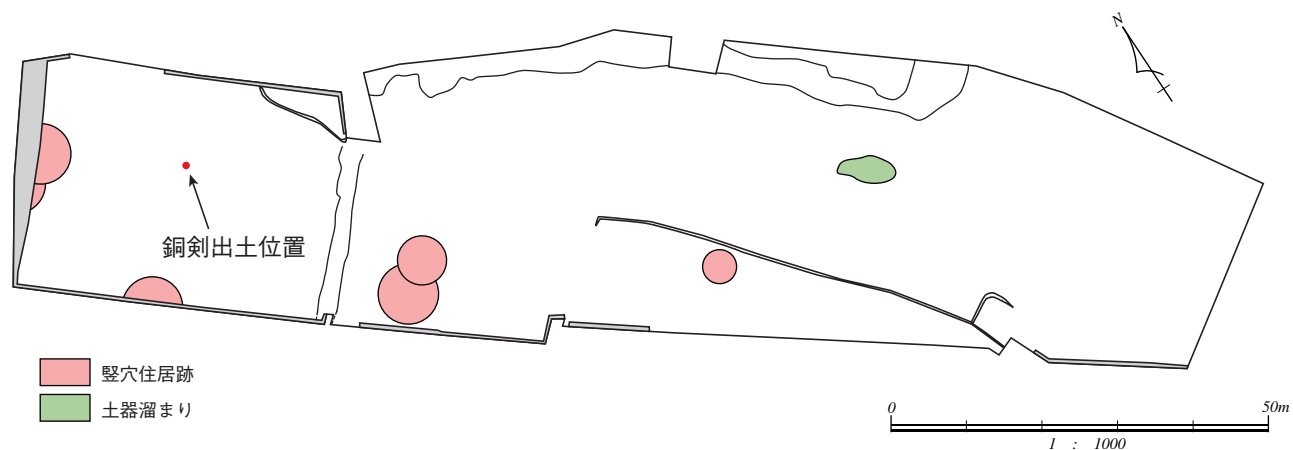
周辺の弥生時代の様子をおおまかにとらえてみると、中期前半が空白で、中期後半から再び遺物の量なども増加していき、後期に弥生文化の盛期を迎えたと見ることができます。本遺跡が該当する中期に着目してみると、山際の洪積台地上から各所で土器が見つかっており、遺跡としては、山口遺跡(周辺の遺跡位置図中の12)、一本松遺跡(同図中13)、下岡遺跡(同図中16)、南甲遺跡(同図中23)等が挙げられます。

本遺跡の調査は、昨年度に主に中世・古代の調査を行い、多数の土坑や柱穴・掘立柱建物を検出しました。遺物としては須恵器の杯や甕・備前焼の甕や鉢・土釜、土鍋、土師器の杯等が出土しました。現在は、弥生時代中期末の遺構・遺物の確認を行っている最中で、竪穴住居跡・土坑・柱穴等が見つかっており、遺物としては平形銅剣・甕・壺・高杯等が出土しました。特に平形銅剣が遺構から発見されたのは愛媛県内で2例目で、貴重な出土例となります。本遺跡の近くに5口の平形銅剣が見つかった保田遺跡(同図中15)があり、今回の銅剣と併せて、この時期の朝倉地域を検討する上で重要な資料となります。主な遺構としては竪穴住居跡を6棟検出しており、その内3棟は8mを超える大型の住居跡です。大型の住居は通常、集落到1~2棟の検出が多いのですが、本遺跡では現状で5割が大型住居であり、銅剣と併せて集落の特異性がうかがわれます。また、本遺跡の周辺にある下岡遺跡等の弥生時代中期の遺跡と併せて集落の内部構成・地域の集落構成等、今後の調査によって解明していく必要があります。

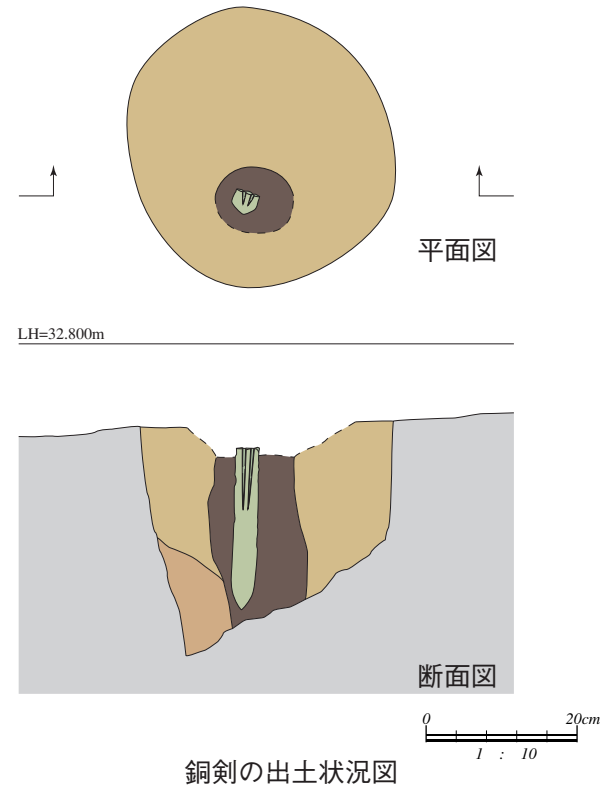


周辺の遺跡位置図

- | | |
|------------|------------|
| 1 朝倉下経田遺跡 | 22 本堂寺廃寺 |
| 2 鹿の子古墳群 | 23 南甲遺跡 |
| 3 文殊院西遺跡 | 24 高大寺遺跡 |
| 4 鹿ノ子遺跡 | 25 中力遺跡 |
| 5 えげの坊古墳 | 26 中力古墳 |
| 6 宝蔵坊古墳 | 27 城ヶ谷古墳 |
| 7 多伎神社 | 28 浅地車無寺古墳 |
| 8 多伎神社古墳群 | 29 浅地経塚 |
| 9 古谷清水寺遺跡 | 30 行者原古墳群 |
| 10 祝谷古墳 | 31 山越古墳 |
| 11 山口散布地A | 32 世田山城 |
| 12 山口遺跡 | 33 笠松山遺跡 |
| 13 一本松遺跡 | 34 野田山古墳群 |
| 14 根上がり松古墳 | 35 野々瀬遺跡 |
| 15 保田遺跡 | 36 野々瀬古墳群 |
| 16 下岡遺跡 | 七間塚古墳 |
| 17 樹之本古墳 | 37 荒神社墳墓群 |
| 18 岡遺跡 | 38 長井家一統墓地 |
| 19 大谷古墳 | 39 満願寺古墳 |
| 20 法花寺蔵骨器 | 40 欄宜屋敷古墳群 |
| 21 高大寺蔵骨器 | 41 新谷森ノ前遺跡 |



弥生時代中期末遺構配置模式図



銅剣の出土状況図

銅剣の出土状況

銅剣は、残存値で直径約35cm・深さ約30cmの遺構内より出土しました。通常の埋納形態では、剣を横にした状態で出土しますが、今回出土した銅剣は、遺構内に剣先を下に向けた状態で出土しており、たいへん特異な出土形態です。

銅剣は剣身上半が長さ約21.1cm・幅約4.6cm残存していました。

出土した遺構の土層断面を観察すると、遺構自体の埋土は黄褐色の土ですが、銅剣の周囲を黒褐色の土が取り巻いているように観察できます。

出土銅剣の解説

朝倉下経田遺跡より出土した銅剣は、平形銅剣I式と呼ばれるものです。この平形銅剣I式は細形銅剣→中細形銅剣→平形銅剣と続く系譜の中で、弥生時代中期末から後期にかけて出土します。朝倉下経田遺跡では、銅剣が出土した遺構の中から弥生土器などの時期を特定できる遺物は出土していませんが、周囲の竪穴住居跡や柱穴・土坑などから弥生時代中期末に限定される壺・甕・高杯などが出土していることから、銅剣も弥生時代中期末のものと考えられます。

銅剣を観察すると、鑄造時の若干の鑄残しは残るものの、全体をきれいに研磨しています。刃はつけられておらず、実際に物を切ったりはできないようになっています。このことから、銅剣が実用的なものではなく、マツリなどに使用する、祭器であることが考えられます。



(実寸大)

朝倉下経田遺跡出土銅剣

銅剣出土の意義

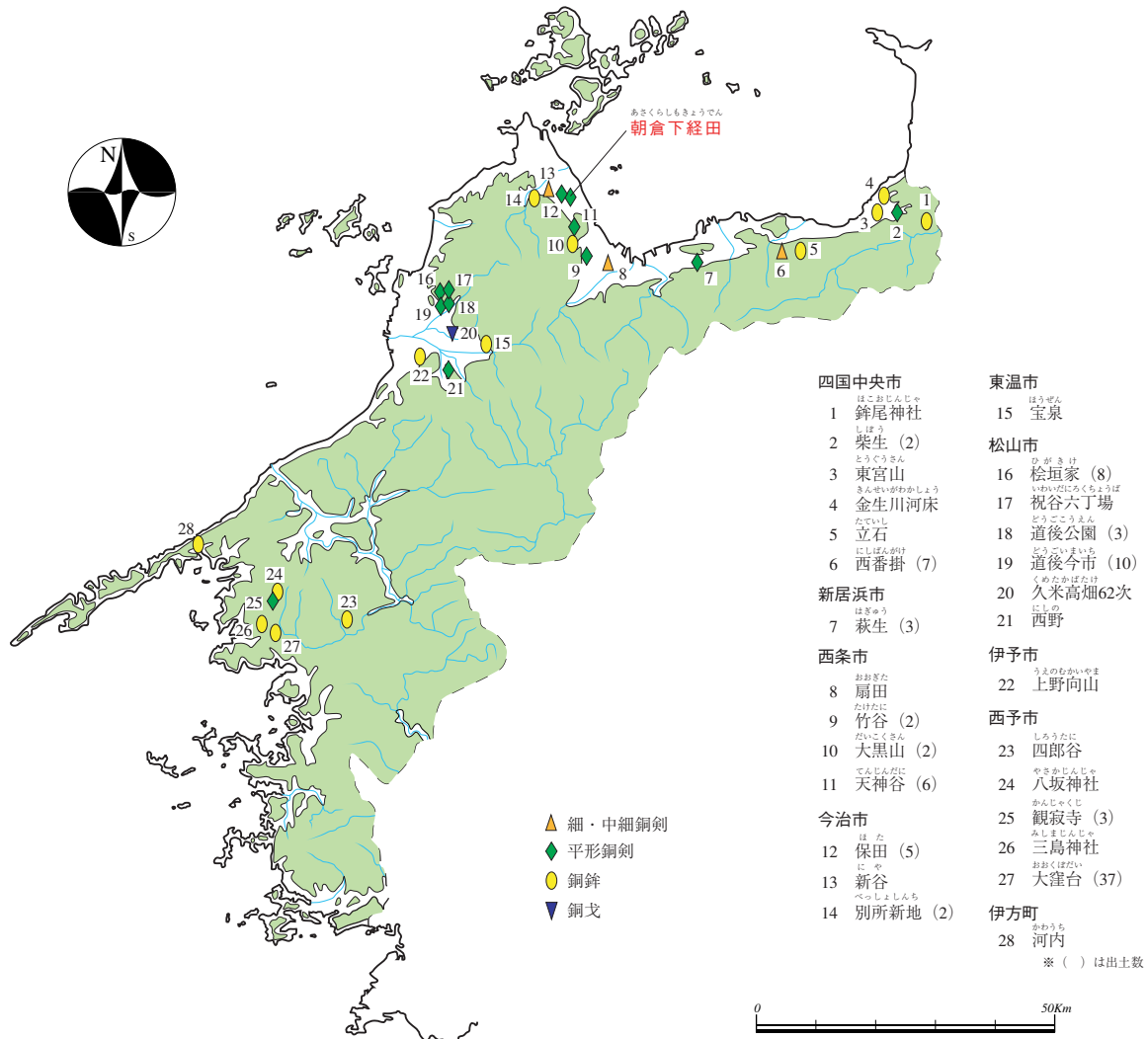
銅剣の型式	平形銅剣I式
出土の状況	剣先を下にして立った状態
出土位置	竪穴住居跡に囲まれた遺構空白部 (遺構が皆無ではなく、柱穴状の小穴が検出されているが掘立柱建物としての構成は確認できない)
出土遺構	柱穴状(周辺に同様の小穴あり)
銅剣の埋納時期	弥生時代中期末～後期初頭(約2000年位前)*伊予東部土器編年から

この銅剣は約2000年位前の弥生時代中期末～後期初頭に、集落の中央に設けられた柱穴状の小穴に立てた状態で埋納されました。従来、剣に限らず武器形青銅器の埋納姿勢は刃を立てるか刃を水平に置くケースが大半で、垂直に立てた状態の検出例といわれているものは僅か数例しか知られていません。しかし、それらはどのような埋納遺構であったのか写真や図で確認することができません。よって垂直に立った状態が検証できる発掘事例としては全国で初めてと言えます(平形銅剣が発掘で出土した事例としては、松山市祝谷六丁場遺跡に次いで県内で二例目)。

埋納理由は地中保管説、地中奉獻説、境界守護説などがあります。単純に埋めて保管したとする以外の考え方は、いずれも土地に対する地鎮や守護を意識しています。一つの解釈で結論がでるものではありませんが、剣を立てていることから、集落の安寧を願っているのでしょうか。

青銅器は集落間の結合を意図し、より広範な社会的共同体の姿を考察する上で重要な遺物です。

今後、埋納遺構の形状などについて詳しく観察し、また剣のまわりの土に含まれている成分の分析などを通して、剣が箱に入れられて埋納されたのか、布などでまかれていたのかなど検証作業が必要です。過去の出土資料も含めて総合的に検討し、当地における弥生共同体の復元が今後の課題です。そのための新たな資料を提供できた意義は大きいといえます。



弥生時代青銅器出土分布図